

創刊15周年記念
連載

東京・日本橋〜京都・三条大橋

東海道五十三次を往く

第3回



苅部家本陣跡の通用門
代々保土ヶ谷宿の本陣を務めた苅部家の本陣跡。苅部家10代目当主は、安政6(1859)年の横浜開港に尽力した名士としても知られる。



保土ヶ谷宿

街道沿いに現存する
江戸時代建立の史跡

保土ヶ谷宿は、東海道五十三次の四番目の宿場町。広重が描いた帷子川は、昭和39(1964)年の河川改修工事で大きく川筋を変え、旧帷子橋跡が天王町駅前公園内に再現された。街道沿いには、江戸時代に建立された石造りの道標や本陣の門構えなど、貴重な史跡が現存している。宿場町跡を抜けると現れるのが、日本橋を発つてから最初の難所と言われた「権太坂」。現在は舗装されたならかな道が続くが、当時は傾斜のきつい一番坂、二番坂が続き、旅人泣かせであったという。

地図を片手に
行きましよう

権太坂
箱根駅伝の往路2区の難所として有名な「権太坂」は、国道1号線沿いにあり、旧東海道のものとは場所が異なるので注意。



金沢横丁の道標
東海道と金沢道の分岐点にあたる交差点には、江戸時代に建てられた道標が4基残る。



おみやげ

境木おじぞうさんもなか
(小倉あん・栗入り白あん)各200円
権太坂を登り切った先、境木商店街にある菓匠。境木地藏尊のお地藏さんの姿をあしらった皮の中に、あんときゅうひを入れた「境木おじぞうさんもなか」は、やさしい甘さ。

菓匠 栗山
☎045-713-2515
横浜市保土ヶ谷区境木本町1-33
🕒9時〜19時(時期により変更あり)
🌕月曜(祝祭日の場合は営業)



高札場跡・問屋場跡・助郷会所跡
木製の札に法令などを記して往来の人々に知らせた「高札場」、大名行列の宿泊先や運搬飛脚の手配を行った「問屋場」、地域の村からの人馬提供を取りまとめた「助郷会所」など、宿場制度を支えた史跡が並ぶ。

歴史の道 案内板
旧街道は大通りから細い路地に入ることも。案内板や手元の地図でこまめに道筋の確認を。



ミスモ編集部が東海道五十三次をめぐる大プロジェクト。第3回は、現在も横浜市の行政区としてその名を残す、保土ヶ谷宿と戸塚宿をご紹介します。



澤邊本陣跡

戸塚宿の二つの本陣の一つ。明治天皇の東下の際には、行在所にもなり、その記念碑も立っている。



内田本陣跡

間口十八間(約32.8m)・奥行十四間(約25.5m)、畳数にして約152畳もあったと言われる大きな本陣だ。



脇本陣跡

脇本陣は、本陣だけでは宿泊できないときに利用された。戸塚宿には3軒の脇本陣があった。



戸塚宿

江戸発最初の宿泊地として栄えた宿場

柏尾川にかかる「吉田大橋」(現在は「大橋」と名称を変更)を渡れば、戸塚宿に至る。東海道五十三次を歌った民謡「お江戸日本橋」の歌い出し「お江戸日本橋 七ツ立ち」にあるように、江戸時代には夜明け前(現在の午前4時)ごろに日本橋を発ち、1日歩いてこの地で宿をとるのが定番であった。本陣二つに加え、脇本陣が三つ、大小75軒の旅籠があったとの記録があり、大変に栄えた宿場町であったことがうかがえる。当時の面影は少ないが、街道沿いの案内板で、その跡地を知ることができる。

続く!



宿場町を知る

街道の拠点となった宿場には、本陣、脇本陣、旅籠などの宿泊施設のほか、荷物を次の宿場まで継ぎ送りする業務を行う問屋場などが点在した。

高札場

幕府や領主による禁止事項「法度(はつと)」や、取り決め「掟書(おきてがき)」などを書いた板札を、人目につくように掲げておく場所。人通りの多い町の入り口や中心部が選ばれた。

問屋場

大名や幕府の公用旅行者のために人足や馬を用意し、次の宿場まで人や荷物を送る手配「人馬継立(じんばつぎたて)」をする場所。また、幕府の公用書状や品物を次の宿場に届ける「継飛脚(つぎびきやく)」も請け負った。



脇本陣

本陣だけでは全員宿泊できないときに、予備にあてた宿舎。大名などの宿泊がない時は、一般旅行者も宿泊することもできた。本陣より規模は小さいが、諸式は同じ。

本陣

もとは、戦場で大将がいる本営のこと。江戸時代に、参勤交代の大名や旗本、公家など、身分の高い人が宿泊に利用した邸宅の名称に。主人は街の有力者や名主で、名字帯刀や、建物に玄関や書院を設けることが許された。

